

演題名：「和食だし体験講座」における児童と大学生の交流が家庭での料理意識・行動に及ぼす影響

筆頭・共同演者名：濱口郁枝<sup>1)</sup>，西村佳子<sup>2)</sup>，濱本 藤<sup>2)</sup>，好村佐知子<sup>3)</sup>

所属機関：1) 甲南女子大学人間科学部，2) 大阪ガスネットワーク（株），3) 雲雀丘学園小学校

**【目的】**「和食だし体験講座」（大阪ガスネットワーク主催）において、大学生が主体的に参画し、児童との交流を深める産学連携活動を実施した。本研究では、この交流が児童の料理の意識や行動に及ぼす変化を検証することを目的とした。

**【方法】**2023年10月、兵庫県宝塚市内の小学校において、5年生143名を対象に講座を実施した。大学生はだしの取り方、みそ汁・だし殻の佃煮のデモンストレーションを行い、調理実習で指導補助として児童との交流を図った。アンケートは4件法で児童および保護者に対し、講座前（前：6～7月）、直後（後：10月）、追跡（その後：12月～翌1月）として実施した。質問項目は「和食をよく食べている」「和食が好き」「自分でみそ汁を作る」「自分で料理をしてみたい」などである。自由記述は「子どもから講座の様子を聞いて気づいたこと」「授業後の食生活の工夫」などである。分析は基礎集計、テキストマイニング、因子分析（自分で料理をしてみたいなど6項目）、重回帰分析（従属変数：料理に対する自己効力感、独立変数：だしの理解など・性別）、対応のあるt検定（前とその後<sup>1)</sup>の平均値比較）を用いた。

**【倫理的配慮】**本研究は、ヘルシンキ宣言の趣旨に沿って行ったものであり、対象者（保護者）には、研究の目的・意義を文章と口頭で十分説明し同意を得て実施した。なお本研究は「Daigas グループの企業行動憲章・企業行動基準」に基づいて実施した。

**【結果】**前後調査で親子共に揃った回答は143組（100%）、有効回答は前が129組（90.2%）、後が133組（93.0%）、その後の回答は88組（61.5%）、有効回答は79組（89.8%）であった。前では「和食をよく食べている」109名（84.5%）、「和食が好き」113名（87.6%）であった。一方、保護者が「子どもはみそ汁を作ることができる」と回答した割合は27名（20.9%）であった。後では「楽しかった」132名（99.2%）、「もっと和食を食べたい」125名（94.0%）であった。自由記述では「大学生が優しく接してくれて楽しかった」などの記載があった。因子分析により「料理に対する自己効力感」を確認し、重回帰分析では「昆布やかつお節のことがよくわかった： $\beta = 0.343, p < 0.01$ 」、「合わせだしの作り方がよくわかった： $\beta = 0.254, p < 0.01$ 」などが有意に関連した。前とその後<sup>1)</sup>のt検定による比較では「自分でみそ汁を作ることができる」が有意に上昇した（ $p < 0.01$ ）。

**【考察】**幼少期から和食文化やだしに親しむ機会を提供する際には、年代の近い世代との交流によって親しみを感じる事が重要である。大学生が調理補助を通じて分かりやすく指導し交流したことは、児童が「自分でもできる」という感覚を得て、料理に対する自己効力感の向上に結びつくと推察される。また、大学生との関わりが児童にとって親しみやすく、楽しい学びとして記憶に残ったことが示唆された。さらに、児童を介して保護者が講座内容を知り、家庭で料理に関する親子の会話が増えたことは、世代間交流の波及効果であると考えられる。大学生にとっても、指導経験を通じて食文化の理解と教育力を高める機会となり、双方にとって意義ある交流であったといえる。今後は対照群との比較や継続活動が必要である。